

人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究 IV

—— Rosenzweig P-F Study とその人格理を
中心として —— : 神経症者群の因子分析※

一 谷 彊

Factorial, experimental and clinical study of personality especially
in terms of the Rosenzweig P-F Study and his personality theory
—— The factorial structure of neurotic patients ——

by

Tsuyoshi ICHITANI

Received August 17, 1965

問題及び目的

人間性の究極的な理解は、個体の独自性にあるが、他方において、科学の理念は全ての個体の行動を共通に支配している普遍的な法則性にあることもまた、個体の独自性に劣らず重要な性質であることは否定できない。個体自身にそなわっている独自性と共通性との相矛盾した両性質をどのように止揚するかが、従来、個性心理学に課せられてきた課題の一つである。Rosenzweig (1950) は、この問題を一般心理学における法則 (laws) の代わりに、標準 (norms) の概念に置き換えることによって解決すべきことを提案している。

ここに標準 (norms) とは、心理学的行動を解釈したり、理解したり、または解明したりする基準または標準を意味する。勿論こうした標準は、心理学者の研究においては是認されていない時もあるけれども、黙認されているものである。殊に、このことは実験心理学者の研究には頗るありがちであるが、精神測定学の領域では、全くこの名称のもとに公然と用いられている。それは個体差を測定する統計的標準である。人格の心理療法的分析では標準の概念を通常用いずに、主として解釈という言葉を用いている。標準 (norms) として、彼は普遍的、集団的及び個体的の3種標準 (universal, group, or individual norm) を区別している。

人間の一般法則を研究対象にしている心理学は暗黙のうちに普遍的標準を用いるのが特徴である。所与の条件がみたとされると、普遍的に用いられるようなある種の機能的行動基準があることを仮定している。このような標準は、例外を認めないという意味で絶対性のものである。集団標準は精神検査や精神測定学的個人差測定の説明から直ちに理解されるものである。ここでは心理学者達は標本理論や誤差法則に基づいて、中央値や分布値によって特定個人を所与の年齢、性別、精神医学的診断などの分布上に位置付けしようとするものである。かくして集団は、その集団に対して個人の一致または不一致を測定する経験的標準となる。通常は、個体を比較するのに、その集団の平均値を用いる。普遍的法則のみを専ら用いる時は、個性性がその中にはいらないので、例外的行動として捨象されるよ

※本研究にあたり、住田勝美教授並びに京都少年鑑別所課長 林 勝造先生の御教示と、京都刑務所分類課津田浩一氏の御協力を頂いた。ここに深く謝意を表する。また資料蒐集に御協力頂いた三聖病院 宇佐晋一院長にも併せて謝意を表したい。

うに、集団標準においても、同様に個体のうち集団に不一致のものは消極的な意味しか持たない。しかるに第3の標準である個体標準は、一個人が自分自身の参照標準となるのである。私的な世界、私的な言葉、個人的事象群などといった諸概念は、その人自身を解釈する場合の文脈として、個体性の重要性を強調させることになる。自由連想法は心理学においてこの見地を最初に徹底的に適用していた。こうした標準から見ると、人の行なうものは全てその人に特有なものであり、且つ個体の経験、要求及び要求の体制化の言葉で、混沌としている行動でさえも理解できるようにすることが精神力動論と臨床的実践の仕事となる。

このように3種の標準を区別したが、それは3標準を孤立化させるためのものではなくて、各標準の特性を明確にするためであり、且つ、これらは次ぎのように関連させることができる。この関連化において、扇のかなめとなるものは個性法則乃至個体標準であって、他の2者はいわば補助的なものとなる。なぜなら、この個性法則は元来最も包括的であり、従って最も排他性のものではないからである。さらに、最も具体的にして且つ個体的側面の行動から接近することによってのみ、こうした行動面を正当に理解する人格理論を建設することが可能と思われるのである。心理学は究極的には個性的な人が示す環境との調整と、要求実現の仕方とを明らかにし、これの理解に役立つものでなければならぬから、個性的な人から始めるのが最も重要となる。同時に、個性的なものを理解するためには、その個人と1つまたは2つ以上の社会的集団との関係を考慮せずには理解することができない。もし一種の心理学的唯我論に陥らないようにしようとするならば、個人と、その個人が集団状況中に一部分となって有機的に関係している事実とを考慮しなければならない。個体的標準はその解釈学的価値 (a semantic value) で重要であるが、その意味を限定する (a delimiting value) ために集団的標準を用いねばならぬだろう。集団的標準によって、個体の行動が本人にとって特有なものであることがわかれば、個体的標準の解釈学的価値を一層健全に適用することができるようになる。このように考えた個体と集団との標準間の関係についての例は投影法から容易に得られる。普遍的標準も個体の行動を完全に理解するためには集団的標準よりも一層重要だとは云えぬとしても同様に重要である。個体を本人自身の言葉で理解しようとするのが明らかに意図の一つであった Freud の研究においても、一般原理をよりどころとしていたことは明らかである。もっとも、その一般原理は実験心理学において行なわれているものとは異なった一般原理である。抑圧 (repression)、投射 (projection)、置き換え (displacement) などの自我防衛機制が、ここに云う一般原理の具体的概念例であって、これらの概念は、その表現に関して所与の諸条件がみだされている限りにおいては普遍的に適用され得るものと考えてよいだろう。こうした一般概念の方が古い一般心理学の一般的原理よりも一層よく個体的標準に一致する理由は、前者が、個体を、本人の最も私的関心事について観察することから導き出しているからである。かくして、一般的行動法則は望ましいものであるばかりでなく、本質的なものとなる。

このように、個体内における事象群を基礎にとり、これを先ず個体的標準によって解釈し、これを出発点として、次いでその個体を特徴付けている意味内容を集団的標準によってそれが普通か異常かを限定し、最後に、本質的には普遍的標準である人格内の変形現象を説明する一般法則に進んで行けばよい。こうした展望に従ってやれば、何一つ本質的なものを省略することがなくなり、一般法則も正しく利用できることになる。また個体の集団関係、従って、その個体と他者とを必然的に考えることも考慮されることになろう。そして、最後に最も重要な行動面である個性の内在的性質 (the intrinsic qualities of individuality) も、その人の生きた心理学の中に保持され、実現化されることになる。

かかる, Rosenzweig の個体的, 集団的及び普遍的の3標準を P-F Study に直接あてはめて解釈してみよう。P-F Study の欲求不満場面における個人的反応語を一定の基準に従って E, I, M 等に解釈し記号化することが, 語の解釈学的個体的標準 (semantic individual norms) であろう。これらの語義を顕型的水準で表示した心誌で表わすこと (psychographic representation) によって, 特にどの反応語が強調され, または逆に軽視されているかが集団的標準によって一見して明らかになる。このような特有な反応を示す心誌をもたらすものはどのような個体内の力動性に基づくものであるかを推測しようとする時, ここで普遍的標準の援用が要請される。顕型としての心誌を元型としての自我防衛機制という精神力動的普遍標準で説明する段階である。従って, この最終段階における個性の理解は, もはや個性の記述ではなく, 全く純粹の推測による説明段階である。かくして, 特定個人の「独自に表現された行動」(an overt idiographic behavior) を, この行動の背後に潜む, 各人に共通で一般的な精神力動的働きによって因果的に説明するようになる。

要するに, J. S. Mill の「性格学」の構想は, 心理学の一般法則を適用して各個体の「独自性」がどのように形成されていくかを明らかにすることによって, 科学としての性格学を建設するにあったが, この実現には Fr. Galton によって, 個性研究にとって最もふさわしい方法として, 原理的には全く異なっているが, 「精神測定法」と「投影法」との2方法の提唱となって個性研究の方法論的前進の基礎が確立したといえる。個性の科学的研究の一方向は正統派的展開であって, 一般心理学から発達した個人差心理学における精神測定法によるものであり, この精神測定法の原理内にあって, 最初は個性構造の単一性質についての客観的評価が研究され, 次いで多数個の性質間を客観的且つ量的に関係付ける特殊な統計技術として因子分析法の適用となって人格の客観的類型化が求められるようになった。ここまでは個性の記述の段階であって投影法の精神に沿ってきたものと原理的には異なっているが, 個性の科学的研究方法としては各自意義がある。かくして求めた個体の類型的人格像が, 個体内においてどのような過程によって個体の独自性があらわれるかを説明するために, 投影法の説く自我防衛機制の如き直観的解釈を避けて, 一般心理学の正統派的精神に則して, 例えば, 学習理論を適用しようとする。この線に沿って研究を展開している代表者は H. J. Eysenck (1957, 1960a, 1960b, 1964) である。第二の個性研究は上述の Rosenzweig 等の主張する「投影法」を方法論的根拠として, 主として Freud 等による臨床的要請からの展開であろう。一言に, 個性研究には, 精神測定法の如く, 多から個へ, 外から内への行き方に対して, 投影法の如く, 個から多へ, 内から外への行き方があり, 両者は全く対照的であるが, 所詮, 何れの方が正しくて, 何れの方が間違いとは云い切れない。両者の各特色を深く理解して適切に活用すればよいだろう。要するに P-F Study は精神測定的な因子分析的研究も原理的に可能であるし, また Rosenzweig の主張するように, 投影法精神に沿って個体内の力動性の理解による個体の独自性の研究を特色としていることもまた当然であろう。

このような点から, 精神力動学と精神測定法という, 従来相容れない領域を止揚する道具として, P-F Study が有力なものとなることが考えられ, これを因子分析することによって精神力動学と精神測定法との間に橋渡しを可能にするものとみてよいだろう。

一谷 (1964, 1965 a, 1965 b) は, 従来, 正常群について, P-F Study の因子分析を行ない, 発達的に恒常な因子を見出し, これが実体性を明らかにするための実験的研究を行ってきたが, 本研究では, 異常群の代表として, 神経症者群を対象として, P-F Study を因子分析し, 因子構造を明らかにし, 正常群との間に相違があるかどうかをみてみたい。

方 法

Rosenzweig 原著，住田・林共訳の P-F Study 成人用日本版を，京都三聖病院入院の男子神経症患者 289 名に施行した。

反応語の評点に当っては，Rosenzweig の提案している語義的解釈に忠実に従うために，住田・林・一谷（1964）によるローゼンツァイク P-F スタディ使用手引改訂版の線に沿った。評点者による個人差をなくすために，一谷と協力者の津田とが別々に評点し，不一致の場合は，手引に従って合議の上評点を決定した。欲求不満場面の誤認からくる評点不可能なものは，各被験者ごとに，これが多い場合，即ち場面の誤認を 3 場面以上に亘っている場合には，この資料は因子分析の目的にそわないものとして棄却した。その実質人員が 289 名である。

評点した資料は，各被験者ごとに，各評点因子について百分率に改められた。これは，P-F Study では全部で 24 の欲求不満場面から構成されているが，被験者によっては，場面の誤認があったり，反応しなかった場面があって，評点し得る場面が 23 以下に落ちているものが見られたので，これを同一の尺度に乗せるための手段としてこのようにしたのである。ここで，3 つ以上の場面に亘って誤認や無反応の場面がある資料を棄却したのは，それ以上に誤認や無反応が多いと，1 個の反応語の占める百分率が 4 % から，5 % に落ち，従って，1 個の反応語の重味が変わる可能性があると考えたからである。

このように百分率に改められた各反応語について，今度は平均と標準偏差を求め，これを用いて標準得点（Z-score）に修正し，Thomson（1951）の提案により，

$$r_{jk} = \frac{\sum_{i=1}^N Z_{ji} Z_{ki}}{N}$$

但し， r_{jk} ……評点因子 j と k との相関関係

Z_{ji} ……評点因子 j における，個人 i の Z-score

Z_{ki} ……評点因子 k における，個人 i の Z-score

N ……被験者数

を用いて，評点因子間の相互相関関係を求めた。ここで，相互相関算出に当って，標準点として Z-score を採用したのは，因子分析を施した後，回帰係数を求めて，さらに，因子得点を求める必要のある時に，Z-score であることが前提となっているからである。

かくして求められた相互相関表に，Thurstone 重心因子分析（Thurstone 1947, Cattell 1952, 四方・一谷 1963）を施し，Thomson（1951）の記載する，因子の有意性の検定法，即ち，Burt, McNemar, Tucker 等の規準に従って有意な因子数を決定した。その後，軸の転回を行なって，心理学的に意味を持つ転回行列を求め，これに最終的な因子の解釈を施すことにした。

因子分析に当って採択した評点因子は，E'，E，e，I'，I，i，M'，M，m，E，I の 11 種であり，これに GCR を加えて 12 種目のバッテリーとした。

結 果

評点因子間の相互相関関係は第 1 表にみられる如くである。正の方向に積極的な相関を示すものは

① E' と I'

② E と E

第1表 相互相関関係 N=289

(小数点略)

No.	No. 因子	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
No.	因子	E'	E	e	I'	I	i	M'	M	m	E	I	GCR
1	E'		-159	-283	300	-035	-420	066	-235	-385	088	-192	-014
2	E	-159		026	-169	-454	-285	-270	-424	-290	360	-018	-073
3	e	-283	026		-156	-197	090	-144	-223	-142	056	137	-209
4	I'	300	-169	-156		-162	-325	-044	-103	-121	-074	-106	-079
5	I	-035	-454	-197	-162		032	-003	212	-007	-414	420	-112
6	i	-420	-285	090	-325	032		-042	101	262	-104	109	-078
7	M'	066	-270	-144	-044	-003	-042		-131	-129	-069	-099	113
8	M	-235	-424	-223	-103	212	101	-131		194	-113	-074	348
9	m	-385	-290	-142	-121	-007	262	-129	194		-047	-119	146
10	E	088	360	056	-074	-414	-104	-069	-113	-047		-263	282
11	I	-192	-018	137	-106	420	109	-099	-074	-119	-263		-193
12	GCR	-014	-073	-209	-079	-112	-078	113	348	146	282	-193	

⊕ I と M, I と I

⊖ i と m

⊕ M と GCR

⊖ E と GCR

となっており、逆に負の方向に顕著な相関を示すものは、

① E' と i, E' と m

② E と I, E と M

③ I' と i

④ I と E

などとなっており、従来の研究にみられるように、外罰反応に対して、内罰及び無罰反応が負の相関を示す傾向にあり、内罰及び無罰反応の間ではかなり高い正の相関をもたらしうことがうかがわれる。このことは、Rosenzweig (1938, 1944) が、外罰反応に対しては内罰反応を対極においており、無罰反応をこれとは別の次元においているのとは異なって、むしろ、外罰反応に対して、内罰及び無罰反応の両者が対極にくることをほのめかしているように思われる。即ち、Rosenzweig においては、外罰及び内罰の両反応を「憎しみからの罪悪感」(hate-guilt) によって説明しており、それが自己に向かうか他者に向かうかによって、この両者の反応がもたらされるとしており、一方、無罰反応は、「愛情からの罪悪感」(love-guilt) からくるものとの説明を加えているが、反応間の相互相関関係からは、そのことが否定される傾向にあることを示唆しているのではなかろうか。このことはこれまでの一谷 (1964) の研究と一貫して示されており、注目すべき点である。

この相互相関関係を因子分析して重心因子 (centroi factors) を求めたのが第2表である。因子の有意性の結果は、第IV因子以後も有意性がみられる傾向にあったが、第III因子までは分散(寄

与量) がかなり大きいものに対して、第Ⅳ因子以後では大きく減少し、全体の寄与量からみれば意味のある因子とはみられないので、第Ⅲ因子までにとどめ、第Ⅳ因子以下は棄却した。重心因子行列の第

第2表 重心因子行列 (小数点略)

群		神 経 症 者 (N=289)		
No.	評点因子	I	II	III
1	E'	-380	352	526
2	E	-560	-317	-318
3	e	-148	-425	-187
4	I'	-281	301	360
5	I	543	-200	484
6	i	445	-231	-273
7	M'	106	169	236
8	M	523	294	-169
9	m	413	134	-320
10	<u>E</u>	-378	215	-434
11	<u>I</u>	218	-535	254
12	GCR	160	511	-294

たものが第4表である。第Ⅰ₁因子は、E, E'に対してI, I'が大きく寄与しており、付加的にかなりの負荷量をもってMが関与している。これは、一谷(1964)が正常児群について研究した場合の第Ⅱ₁因子に対応しているものと思われ、本来はE, E'~I, I'の対極性を示すものであらうと思われる。第Ⅱ₁因子では、GCR, M, mに対してI, E, eが対極に局在しており、正常者の場合には、GCR, M, m~E', eであったものが、このような形になって抽出されたもののようである。ここで大きく異なっているのは(一)極であって、これまで、E', eとなるものがI, E, eとなっている点である。第Ⅲ₂因子では、i, m, eにE', I'が対極性を示しており、従来、i, mにE,

第3表 転回因子行列 (心理学的因子行列)

群		神 経 症 者 (N=289)		
No.	評点因子	I ₁	II ₁	III ₂
1	E'	007	-121	-730
2	E	-639	-300	130
3	e	-230	-301	306
4	I'	-012	-037	-545
5	I	725	-199	068
6	i	195	-109	525
7	M'	226	058	-203
8	M	320	504	178
9	m	142	411	319
10	E	-562	246	-031
11	<u>I</u>	326	-471	264
12	GCR	-046	603	-045

・小数点略

・因子の添え文字は軸転回の回数を示す

第4表 心理学的因子模様

群		神 経 症 者 (N=289)		
極	因子	I ₁	II ₁	III ₂
	(一) 極	E, E	<u>I</u> , E, e	E', I'
	(+) 極	I, I, M	GCR, M, m	i, m, e

Ⅰ因子にみられるように、負の方向に負荷量が大きく寄与している反応評点因子は、E', E, E'であり、逆に正の方向に大きい負荷量を有するものは、I, i, M, mであって、相互相関関係において視察されたように、外罰反応に対して、内罰及び無罰反応が対極性を示す結果となっている。勿論、判然とした、外罰対内・無罰の傾向があるわけではなく、例えば、I'はかなり大きな負荷量をもって負極に、Iは正極という形になっており、これらは、同一系統の反応語であっても、障害優位型の反応と、自我防衛反応とは異なった性質のものであることを暗示している。

この重心因子行列に、心理学的意味付けのための軸転回をして得られたものが、転回因子行列(第3表)である。これを因子模様として表示し

Eが対極的に関与していた点で異なっている。

考 察

1. 重心因子行列について

先に少しく記述したように、第 I 因子では、(－) 極に、E, E' が大きな負荷量をもって寄与しており、これに I', e がかなりの負荷量をもって同じ極にあるのに対し、(＋) 極では、I, M が顕著な負荷量をもっており、ついで i, m が、さらに僅かながら I, GCR が参与した形となっている。このことは、外罰反応に対して、内罰・無罰反応が対極性を示していることを物語るものであって、Rosenzweig の仮定とは異なっていることを示唆する。即ち、彼の仮定では、

$$\begin{cases} E & \text{---} & I \\ & & M \end{cases}$$

のような図式を仮定しているのに対して、因子分析にみられる重心因子の結果では

$$\begin{matrix} & & I \\ E & \text{---} & \\ & & M \end{matrix}$$

の様式となり、外罰反応には内罰反応に相対する性質と、無罰反応に相対するそれとを持っていることをほのめかしている。Rosenzweig は、外罰反応には、単純外罰反応と、投射的外罰反応とがあることを示唆しているが、このような観点が P-F を因子分析にかけると積極的に支持されるのではなからうか。勿論、ここでは重心因子模様からのものであるから軸転回後の転回行列においてこのことが一層判然とするのではないと思われる。重心因子では、抽出される因子の順序に応じてその重要さがほぼ対応していると考えてもよいので、このように、重心因子の第 I 因子で、外罰反応に対して内罰・無罰反応の両者が対極を示すという事実は、欲求不満場面に直面して外罰反応を示す場合に、その動機や、自我防衛機制が、単一の性質のものではないことを物語っているものと解される。

2. 転回因子行列(心理学的因子行列)について

上に述べたような重心因子の様相をより一層明らかにさせるために軸転回を施してみると、第 3 表にみられるような転回因子行列と、第 4 表にみられるような因子模様を示す。

i. 第 I₁ 因子について

この因子軸では、E, E に対して、他方の極では I が大きく負荷を持っており、それに I 及び M がかなりの負荷で寄与している。P-F Study の欲求不満場面に對する諸種の反応の因子分析は、これらの反応を主として動機的地から客觀的に分析したものと解することができる。このように考えると、この因子軸は、一谷(1964)のこれまでの各年令発達段階における P-F の因子分析からも、最も安定し、且つ最も一貫的にあらわれる因子であって、恐らく、欲求不満場面においてみられる反応での一般因子的な意味合いを有するものと解せられる。即ち、Eysenck (1957, 1960a, 1960b, 1964) の想定している外向性～内向性 (extraversion ~ introversion) に対応するような因子軸ではないかと解せられる。欲求不満に直面した際に、余りに主観的な歪みを加えることなく、卒直にその不満を外部に発露するか、それとも内に向けるかといった形のものであろう。一谷(1965a, 1965b)の P-F Study の因子分析によって得られた因子の性質に関する実験的検証からも、ここにみられる因子は、欲求不満に際して、何らの歪みも加えず、単純に、且つ卒直に、その不満を外に向けるか、内に向けるかに関係していることが云える。(＋) 極で、I, I にさらに M が関与している理由として、次のことが想定される。P-F Study の欲求不満面の設定に当っては、大きく別けて、自我阻害場面

(ego blocking situations) と超自我阻害場面 (super-ego blocking situations) とからなっている。このうち、超自我阻害場面では、通常、自己の失策について他者から非難・叱責・咎めを受けている場面であるので相手許容の意味での M-反応は出現しないのであるが、自我阻害場面では、明白に自己に非があるのではなく、客観的事情は相手が悪いとも自己が悪いとも容易には決められず、従って、この場面に反応しようとする各個体は全く主観的にその何れかに判定し得るような場面になっている。この場合、一般的には、

- ① その直接の阻害原因が、相手または外界の事情にある場合と、
- ② 自己にある場合

とに分けられる。前者、即ち、相手が阻害原因となっている場合が大部分ではあるが、これに対して後者の自己原因と、自己原因である超自我阻害場面とを合わせたものが、ほぼ半分ずつになるように場面が構成されているようである。いま、自他原因による自我阻害場面の例を挙げてみると、

- ① 相手または外界事情が阻害原因となっているものとしては成人用場面 1 の如く、自動車の運転手が、慎重に運転したが、服に泥をかけてあやまっているような場合であって、この場面では、相手の手落ちが阻害の原因となっている。
- ② 阻害原因が自己にあるものとしては、成人用場面 22 のように、倒れている者に対して怪我はなかったとたずねているような場合で、この場面では、通常は、自分の不注意が阻害の原因と認知される場合が多いのである。

このように、自我阻害場面では、自己に原因があって欲求が阻害されていると認知される場合があるが、このような場合、自分に原因があったことを素直にみとめると I となるが、そうではなくて、卒直に自分の失策や不注意を認めているが、そういう言葉で表現せずに「あなたが悪いのではないから、気にしないで」という表明をした場合、語義的解釈としては、M と評点されるために、内罰的な言外の意味を含蓄的に有している。こうした点が、因子分析の結果では、示唆的に明らかにされているのではないかと解される。かくして、ここでの M は、左程積極的な意味を有するものではないと考えられる。この因子軸での根幹となるべきものは、やはり、E、E~I、I の対極性であると解したい。

ii. 第 II 因子について

第 3 表及び第 4 表にみるように、この因子軸では、(一) 極に I が顕著な負荷量を有しており、これに E、e がかなりの負荷をもって寄与している。(十) 極では、GCR、M が大きく、m がこれについて大きな負荷量をもって関与する形となっている。

一谷 (1964) の研究におけると同様に、この因子の意味に関しては、

- ① 自我の独立と非独立 (ego-independency or ego-dependency)
- ② 個人間的と個人内的 (interpersonal or intrapersonal)

の二つの概念と、これに加えて新しく、

- ③ 自己許容 (self-excuse)

とによって解釈してみたい。解釈の都合上、(十) 極から考察を加えることにしよう。

先ず GCR についてその内容をみてもみると、P-F Study の成人用では 24 場面中 14 場面に設定されているが、このうち 7 場面が無罰系統の反応によって GCR が設定されており、さらにそのうち 5 場面が M で、1 場面が m で GCR となっている。このことからみて、GCR は M の影響が大であることが予想されるので、因子分析の結果、これは M と同じ範疇に負荷量をもって出現しても至極当然のことである。そこでこの第 II 因子の (十) 極は M、m についての解釈を行えば一応充たされ

ることになると考える。ところで、M, m などの如き無罰系統の反応は、その反応の力動的発生的基礎として Rosenzweig (1938) は、「他から愛されたい」「憎まれたくない」という愛情喪失への恐怖と、愛情獲得への欲求が働いており、Mayer-Gross 等 (1960) のことばを借りれば、疎隔 (alienation) を恐れる自我が根底にあるとする。他者から愛され、憎まれたくないようにするためには、他者の存在が絶対優位の条件となり、個人間的 (interpersonal) な事態に関心を奪われることは否めない。また、他者からの愛情を確保し、維持していくためには、自我の独立乃至確立 (ego-independency) は綺麗に抑圧 (repression) して、自己にとって不都合なことは無視してかからなくてはならない (repression with self-deception)。かくして、自我の独立への欲求は弱い (ego-dependency) と云える。さらに、無罰反応に終止する人は、愛情獲得への欲求を充足するためには、自己の体面を簡単に捨て去ることができるし、且つ、この愛情欲求が通常的手段や方法で達成し得ぬ時は、あえて、自己をいつわって、これを抑圧して、相手の同情を得ようとしたり、また他からよく見られようとの喝采願望のために、誇張した行為や振舞いを平気でやれる。しかも、このような自己を許容する (self-excuse) ためには、相手を許容しないと、自己の存在が危機に瀕することになる。このようにして、GCR というように、自己の所属集団での比較的他者にも認められているような、他者もよく用いるような方法で適応していく必要があるし、また、相手を許容する反応としての無罰反応 (特にここでは M, m) によって自我を防衛していこうとする。このような典型的に極端な人格型はヒステリー型であると解せられる。

一方、(一) 極についてみてみるとどうであろうか。これは、上述の三つの概念で解釈すると次のように考えられるのではなからうか。即ち、上記の (十) 極の対極であるから、自我の確立乃至独立という点では共通であるが、個人間的ではなく、むしろ逆に個人内的であり、自己を許容するために、他者を許容するのではなく、逆に自己の立場を他に対して釈明し (I), 自分の立場を確保するために、自我独立の気持ち弱いものにも拘わらず、相手をなじったり (E), また、自己に矛盾を感じつつも、自我独立性が弱いために相手に依存や救済乃至庇護 (e) を求めなくてはならなくなる。このように自我の独立性が弱い (ego-dependency) のに、ヒステリー型の人のように、あっさり、自我を無視することができず、自我に注視 (intrapersonal) し、しかも、同時に、このように自我への注視が強いので、自己を許容するために、最大の努力をして自己の立場を相手に弁明したり、弁解したり (I) しなくてはならないと解することができる。このような内的葛藤のために、不安 (anxiety) に陥り易いと考えられる。不安は欲求不満の如き最も危機的な状況に対する基礎的な反応様式であるが、逆に不安に陥ることによって、このような状況を回避することが可能になる。そしてまた、この不安回避の一つの方法として自己の身体状態を気に病むことも生じ得るのである。かくして、この (一) 極の典型的なものとしては、不安神経症や心気症となるのではないかと考える。

iii. 第 III 因子について

この因子軸については、従来の研究でとってきた二つの概念、即ち、

- ① 自我の独立と非独立 (ego-independency or ego-dependency)
- ② 個人間的と個人内的 (interpersonal or intrapersonal)

と、新しく

- ③ 禁止 (inhibition)

とによって考察を加えてみたい。

(十) 極では、因子負荷量は i が最も顕著であって、これに次いでほぼ同じ位の負荷量で、 m 及び e が関与する形となっている (第 3 表, 第 4 表)。 i は自己が欲求不満事態に陥れられたときに、そ

の原因を他者や外界事象に求めてこれを非難・攻撃したり、不可避的な事態として許容するのでもなく、むしろ、その原因が自己にありとして自己批判を加え、自責の念にかられるに止まらず、さらに、この事態を解決するために、自己が進んで活動を起こし、自らその後始末をし、罪滅ぼしをしようとするものであって、所謂帳消し(undoing)などの防衛機制によって自己の完璧を期そう(perfectionism)とするのである。そして、自己がこのように完璧を期するために、即ち、完全主義(perfectionism)を全うするに際して、已むを得ぬ場合には、時間的経過にまっして事態を解決するか、または社会的規範や規則に従って解決しよう(m)とするのである。自己の完全を期するために、時としては、相手にも自己と同じことをさせよう(e)とすることもあることが予想される。かくしてこの(+)極ではiが最も顕著な負荷量を持つことになり、m及びeが、それより少ない負荷量であるが寄与してiを補強する形となっている。

ところで、このような典型的な人格としては、強迫型が考えられる。この種の人格の持ち主では、欲求不満に直面すると、先ず他人よりも自己自身が問題となり、自己が完全を期することによって(intrapersonal)、自己の独立を全うしようとする(ego-independency)のである。そこには、他人を責めようとしてそれを抑えているというような禁止や抑止(inhibition)よりも、あくまでも自己自身の完璧が重大な関心事であって、そのために、自己が尚且つ不完全であることが念頭にのぼって、その行為を取り消して(undoing)、同じ行為を繰り返す、それでも満足し切れずにはらいのけようとすればするほど強迫的に(obsessive-compulsive)にその行為を完全を期するために再検討することになるのである。

しかるに、(一)極ではいささか事情が異なる。ここでは(+)極と同様に、欲求不満に陥れられると、自我の独立(ego-independency)を期そうとする点では共通であるが、この自我の独立乃至確立を全うするのに、他者が問題(interpersonal)となる。かくして、欲求不満に陥れられた原因を自己に求める(一)極とは違って他者または外界事象に求めよう(E)とする。しかし、(一)極とは異なって、禁止や抑止(inhibition)が働いているので、自己を欲求不満に陥れた原因者を直接に責めたり、批判したり、非難したり、咎めたりする(E)ことはできず、自己の欲求を阻害したという事態のみを強調して、自己の欲求が充足し得なかったことについての失意や失望を表明したり(E')、時には、うらはらな反応をして、全く影響がなかったような言及をする(I')ことになる場合も考えられる。本来ならば、この(一)極の典型としては、妄想型の人格を想定することができるだろう。妄想型の人格者は、自我の独立を全うするためには、他者の存在が必要となる。そして、欲求不満に陥った原因を他者に求めて投射(projection)し(E)、危機(欲求不満事態)を開閉しようとする。しかし、ここでは禁止(inhibition)が強く働いているために、何らなすところなく(without doing)単に自己が欲求不満に陥っていることを強調する(E')程度に止めて、即ち、障害優位型の反応に止めているのであると解したい。これは、神経症者の一つの特徴が因子分析の結果このような点に表われたものとみてよい。

結 論

Rosenzweig P-F Study を神経症者に実施して因子分析した結果では、これまでの研究と相異しない因子を抽出することができた。そこには、動機的水準では正常者と変わりがないけれども、反応の様式としては、神経症者特有のものが見出された。

ここに、従来の研究とも対応させてみて、一貫して、知能の場合にみられる如き一般因子のみられなかったのは如何なる理由によるものであろうか。欲求不満に際して、これに陥れられた個体は、少

なくとも人間の水準において、また、正常者群としての小学校、中学校、高校生や、異常者群の一つである神経症の如き発達水準や正・異常の水準において、その動機や自我防衛機制には変化のないものと解したい。種々の動機や自我防衛機制のうち、どれが、どの発達水準やどの群で顕著であるか、どの個体において支配的に働いているかということ、それらのものが存在し得るか否かということとは次元の異なる問題であり、従って、知能の如く、一般因子から特殊因子へと分化していったり、特殊因子自身がさらに分化していったりするような性質のものとは異なっていると考えた方が妥当であると思われる。要するに、児童と成人、正常者と異常者とでは基本構造はかわらないものとみてもよいのではなかろうか。基本的因子構造そのものが一般因子とみても、さしつかえなかつたと、現在までのところでは考えられる。ただ、発達の相異によって、即ち発達の段階によって、経験の相異があることは否めないし、正常者と異常者との間には経験の認知の仕方が異なることから、付随的にかわるものがあることは事実である。これは、知能においても一般因子は恒常であるが、特殊因子のうちでも経験に支配されやすいものが変化したり分化したりするのと同様であろう。

Summary

The present study had the purpose to clarify the factorial structure of the reactions of the abnormal adults to the Rosenzweig P-F Study. The subjects used in this study were 289 neurotic patients. The data were analyzed by Thurstone's multiple factorial method. The result showed three significant factors. These factors suggested that, though the neurotic patients showed the different types of reactions to frustration from the normal subjects, the motives of these reactions were considerably and positively similar to the motives of the normal.

The general factor could not be found throughout the previous and the present studies. This fact suggested that the unchangeable factorial structure which was found consistently throughout these studies was conceivably correspondent to the general factor which was found in the factor analytic study of intelligence. The reason why this fact was discussed as above described was that the motives of the reactions to frustration were not changed by development and sex.

参考文献

- Cattell, R. B. 1952 Factor analysis: an introduction and manual for the psychologist and social scientist. New York, Harper and Brothers.
- Eysenck, H. J. 1957 The dynamics of anxiety and hysteria: an experimental application of modern learning theory to psychiatry. London, Routledge and Kegan Paul.
- Eysenck, H. J. (Ed.) 1960 a Experiments in personality. Vol. I and II, London, Routledge and Kegan Paul.
- Eysenck, H. J. (Ed.) 1960 b Handbook of abnormal psychology. London, Pitman.
- Eysenck, H. J. (Ed.) 1964 Experiments in motivation. London, Pergamon Press.
- 一谷 彊 1964 人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究——Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として——：正常児群の因子分析 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 25, 45—60.
- 一谷 彊 1965 a 人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究——Rosenzweig P-F Study の因子構成別に編成した2実験グループのバレー・ボール競技における行動差について 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 26, 29—44.
- 一谷 彊 1965 b 人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究——Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として——：P-F Study の因子分析から得た人格類型により構成した集団の競争場面に於ける

- 行動特徴からみた因子特性の実験的検証 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 26, 45—62.
- Mayer-Gross, W., Slater, E., and Roth, M. 1960 Clinical psychiatry. 2nd ed., London, Cassell.
- Rosenzweig, S. 1938 The experimental measurement of types of reaction to frustration. In Murray, H. A. (Ed.) Explorations in personality. New York, Oxford Univ. Press, 5th print., 1953, 585—599.
- Rosenzweig, S. 1944 An outline of frustration theory. In Hunt, J, McV. (Ed.) Personality and the behavior disorders. Vol. I, New York, Ronald Press, 379—388.
- Rosenzweig, S. 1950 Norms and the individual in the psychologist's perspective. In Reymert, M. L. (Ed.) Feelings and emotions. New york, McGraw-Hill, 327—335.
- 四方実一・一谷 彊 1963 教育統計法入門 東京 日本文化科学社
- 住田勝美・林 勝造・一谷 彊 1964 ローゼンツェイク P-F スタディ使用手引改訂版 京都 三京房
- Thomson, G. H. 1951 The factorial analysis of human ability. 5th ed., London, Univ. of London Press.
- Thurstone, L. L. 1947 Multiple-factor analysis : a development and expansion of the vectors of mind. Chicago, Uniiiv. of Chicago Press.